海外便り〈アメリカ編〉

Eさんへ

青木　章子

お元気ですか。ロサンジェルスで生活し始めて、早くも一年半がたちました。私は相変わらず、UCLAの附属幼稚園で、ボランティアを続けています。子供達とかかわる時、最初はなかなか飛び出してくれなかった英語も、随分なめらかに出るようになってきました。こちらは、長い夏休み（約三ヶ月間）が終わって、ちょうど新学年が始まったところです。

一学期の始まり方は、私には、とても目新しいものでした。入園・始業式がないのです。訪問日と言って、幼稚園の始まる前々日とその前の二日間のうち、午前中の好きな時間に、親子で幼稚園を訪れます。その時初めて、自分のクラスと担任の先生を知ります。先生は、部屋で新学期の準備をしながら、訪れる子供と親との挨拶・会話に忙しそうでした。とてものどかでリラックスした雰囲気の中、さっそく友達になって遊んでいる人達、ひとりでひとしきり遊んで帰る人、そのまますぐに帰ってしまう人など、いろいろでした。

幼稚園の第一日目、子供達は、八時半頃に各々登園し始めると、先生とおはようを交わしてから、室内やクラス周辺の園庭で好きなように過ごしていました。親達

は、先生と、又は親同士でおしゃべりしながら、自分の子供の様子を見ています。私は、と言うと、見通しが良くない園庭なので、子供達がクラスから遠く離れた所へ行かない様に、その都度呼び戻す役を引き受けていました。九時頃になると、先生は子供達（五歳児）を室内に呼び入れ、じゅうたんの上に皆で輪になって座りました。親達の見ている中、各児の名前を呼びかけながらのおはようの歌（子供達は、自分の名前が呼ばれるととても嬉しそう！）を歌い、その後、「この中に知っているお友達がいる？」とか、「夏のあいだに、特別なことがあった？」などの質問から、先生は、新しく受け持つ子供達との会話を始めました。（一クラスの子供の数は二十人前後で、五歳児クラスは、四歳からの在園児と新入園児との混成です。ただし、四歳からの在園児にとっても、友達は新しい集団で、先生も違う人です。）親達は、子供の様子を見ながら、ぽつぽつと去って行きました。これが、入園・始業式にかわる、幼稚園の始まり方でした。

私達が経験している幼稚園の最初の日（四月の入園式）は、子供にとって、親にとって（特に！）、そして私達担任自身にとっても、緊張と興奮の入り混じった、晴れやかでめでたい日ではありませんか。そのかわり、初めて会う親子と挨拶を交わすだけでも大変なのに、そのあと子供達を入園式の部屋まで連れて行き、親と離れて腰かけ、式のあとは自分達の部屋に戻って集合写真……と大仕事がたくさん。三歳児の時は、泣く子もいるし。その日は全く遊ばずに帰らなければいけないことに怒っているH君を、「明日遊びましょうね。」と、苦労してとりなしたのが、まだ記憶に鮮明です。それとは対照的に、成長を共に喜ぶ情感とか、節目を大切にする姿勢には欠けるのかもしれないけれど、子供にとってはより自然で、親も先生も淡々として気負いのない、幼稚園の始まり方に、私は、とてもさわやかでほっとするものを感じたのでした。

Eさんは、どのように思いますか。

さて、以前のお手紙の中にあった「親子の関係、子供に何を育てようとしているか、あれっと思うこと、なるほどと思うこと、いろいろ」についてですが、いくつかあります。

その一つは、子供が小さい時から、感じていること・考えていることを言葉にして表現できるように、そして、それを人に伝えることができるように、大人達が育てているということ。

子供同士にトラブルがあり、子供が悲しそうな顔をして先生のところに来たとします。すると先生は、何があったのかを確認しながら、必ず、「その時あなたはどう感じたの？」「なぜ、そう思ったの？」「それを○○ちゃんに伝えた？」などと尋ねています。四歳の幼い子供同士の出来事であれば、もう一方の子供の所へ先生も一緒に付いて行って、悲しい顔をしている子供に、「あなたがいやだと思ったら、こういう風に言えば良いのよ。」と、例えば、「私はあなたが私のことを○○と言うのが好きじゃない。言わないで。」とか、「私は悲しいの。あなたが私と○○と呼んだから。もう言わないで。」（和訳が不的確かもしれません。）と、先生自身がお手本を示してあげています。

ここでなるほどと思うことは、まず第一に、「あなたはどう考える？」とか「なぜそう思うの？」という大人の問いによって、子供は、自分の感情や考えの前提のようなものを確かめる機会をもらっているということです。「あなたはどう考える？」「なぜそう思う？」という質問は、子供に限らず、大人の私も、アメリカに来てから、より頻繁に受けています。聞かれたことに答える為には、言葉にして伝える為には、自分の感じていること、考えていること（…があるとしたら）が、何なのか、それが何に基づいているのかを、再確認しなければなりません。Eさんもご存知の通り、私はたいてい考えがもやもやとはっきりしないことが多いものですから、この手の質問には最初、当惑してしまいました。（何も考えていないことに気がついたり、言葉の壁もあったりして。）考える訓練・話す練習をしてこなかったこと

を、人のせいにしてはいけないのだけれど、子供の頃から家庭や学校で、大人が「あなたは……？」と尋ねてくれたことの記憶に乏しいのは、私だけでしょうか。

「あなたはどう考える？」「なぜそう思う？」に関連して、もう一つ思うことは、「あなたは……？」という問いが、小さい子供に出される時、そこには、親や先生が、子供を幼児の時から独立した一人の人間として尊重している態度があるということです。一体なのではなく、一対一の関係で、子供に向かう姿勢があるということです。他の例として食事の場面を思い浮かべてみると、親が自分の皿から食べ物を分け与えていたり、子供に先に食べさせて、残りを自分が……という光景をアメリカであまりみることがないのも、それらの態度の表れかもしれません。

最初、先生と子ども、親と子の関係（特に、白人と言われる、アングロサクソン系の人々）をみて、つながりが希薄なのではないか？、日本人に比べて関係が淡白なのではないか？と感じていた私ですが、この頃は、関係のもち方そのものが、少し違うのだということに、気がつき始めています。

話が少しそれました。自分の感じていること・考えていることを、言葉にして表現し、それを人に伝えることに関して、もう一つなるほどと思うことがあります。子供達は、小さい時から、自分の気持ちを表現し、自分の考えを主張できるように、大人達に導かれていると同時に、人の話を聞く姿勢も教えられていることです。先生や親が、子供に、「今は私が（○○ちゃんが）話している番よ。あなたは聞いていなければいけない。」などと言っている場面を、よく目にします。当たり前のことなのだけれど、自己表現が豊かで、友達に対しても適切な自己主張のできる子供は、人の話を聞こうとし、人の気持ちをわかろうとする姿勢も育っているなあと感じます。自分のことを主張するばかりで、人の話には耳を貸さない、勝手に育ってしまった〝自己主張〟とは、全く方向の違うものだと思っています。

この他に、最初はあれっと感じ、今はなるほどと思っている（と言うか、混乱している）ことの一つは、武器おもちゃを作ったり、使って遊ぶことに対する、大人の態度です。

子供は、ブロックや工作などで、自分のピストルや剣を作って遊ぶのが好きですよね。日本では、テレビの影響が大きいと思いますが、たたかいごっこと称して、それらの武器を持ち、自分が強くなった気持ちになって友達同士で遊ぶ姿、又は一人でバーンバーンとやっている姿は、とても自然なことのように感じます。私が三歳児の担任をしていた時はよく、幼稚園のお山で男の子達と（数人の女の子も混ざり）、うちあいをまねたり、紙の剣を振り回したりして、一緒に駆け回って遊びました。

UCLAの幼稚園でボランティアを始めた頃、子供達がたたかいごっこのような遊びをしないことを、不思議に感じていました。ある時、四歳の組の男の子数人が、ブロックを組み立ててピストルにみたて、バーンバーンと遊び始めました。私も一緒に、手のピストルでやりとりしようかなと、人差し指を出しかけた矢先、先生が子供達のところへやってきて、「学校に銃はいりません。」とはっきり言いました。きまり悪そうにブロックを分解する子供達を見て（バナナのおもちゃをピストルにみたてていた子は、別の場面で、「これはバナナだよ。むしゃむしゃ」と、とぼけていましたっけ。）、私は、子供達がそれを悪いことだと思っていることを感じとりました。私は、神妙な顔をしながら、〝人差し指、出さなくてよかった。〟と思っていたのですが、これは私には、とても印象に残る一コマでした。その後にも、子どもがピストルをうつまねをするとか、武器を作ろうとする時に、親や先生が真面目な顔で禁止する場面には、何度も出会いました。あの時の、私の心の中での反応は、――どうして、そんなに神経質に止めなければいけないのだろう？子供にとってはとても自然なことではないか？――です。こういう遊びを幼児期にすることが、将来攻撃的な人間を作るのでもなく、平和を破壊する人間を作るのでもない。逆に、子供の時代にこそ、

ごっこという形の遊びの中で、自分の攻撃性を害なく発散させ、同時に、本当にぶったりして相手を痛くしてはいけないなどの限度――空想と現実の境界――と、行動のコントロールを学べるのだ、と自分の中で反論していました。

ところが、ロサンジェルスでの生活を一年以上経た今、この私自身が徐々に変化し、子どもがピストルをうつまねや、それらを作って遊ぼうとするのを、遊びとしては認め難い思いが持ち上がるのです。おそらく、〝たたかいごっこ〟そのものに対する反応というより、武器に対する反応だと思うのですが…。日本にいた時、先生である自分が一緒になって、よくバーン・バーンなどとやっていたものだと、今思うと恥ずかしくなると同時に、それが、やってもいい〝ごっこ〟に入る（？）ほど、日本は安全で、銃に対する現実的心配のない国なのだと痛感しています。（ちなみに、ロサンジェルスでは、近所のスポーツショップで、簡単にピストルやライフル銃が手に入ります。それらに伴う暴力や犯罪に恐怖を感じながら、私は生活しています。）

たたかいごっこや武器おもちゃに対する反応の仕方については、親や先生に限らず、何人かに聞いてみたところ、アメリカでも人それぞれの様です。ただ私は、「NO！GUN」と言う大人の、真剣な表情から、子供達は何かを学び取っているのだと思います。私自身の、武器遊びに対する感受性や態度の変化に驚いていると同時に、日本のテレビ番組や市販おもちゃなどにみられがちな、感覚の鈍さに、考えさせられているところです。

今、アメリカに来たからこそ勉強してみたいことが、いくつかあります。一つは、移民の子供達の保育・教育――アメリカでは、後手になっている為に大きな社会問題――です。アメリカにいると、日本が、単一民族・単一文化、単一言語をお国柄としていける時代も、経済的・政治的要請から考えて、そう長くはないように感じてしまいます。また、機会があったら、お手紙書きます。

（ロサンジェルス在住）